

第4章 ガイダンス

4-1 ガイダンスとその内容	135
4-1-1 ガイダンス	135
4-1-2 地域の魅力の発見	137
4-2 セルフガイダンス	143
4-2-1 セルフガイダンスの手段	143
4-2-2 ツールの開発	165
4-3 ガイドつきツアー	171
4-3-1 ガイドつきツアープログラムの企画	171
4-3-2 エコツアーのマーケティング	191
4-3-3 エコツアー事業の進め方	217

4-1

ガイドンスとその内容

4-1-1 ガイドンス

～POINT～

ガイドンスとは、自然や文化などに関する詳しい説明や解説のことである。

ガイドンスとは ガイドンスとは、自然や文化などに関する詳しい説明や解説のことである。

エコツーリズムにおけるガイドンスの対象は、原生的な自然、里地里山の自然、そこで繰りひろげられてきた人の生活と自然との関わり、地元につながる生活文化、歴史や地域産業など様々である。

エコツーリズムにおけるガイドンスは、単に植物や鳥の名前を伝えるだけでなく、何故ここにこのような植物や鳥が生息しているのか、植物と鳥の相互の関係や、生息している森全体の営みなどに関連づけた話が重要である。ガイドンスがうまく旅行者にうまく伝わることによって旅行者は自然の不思議さやそこで暮らしてきた人達の知恵に驚き、深く感動する。これによって、旅行者の自然感や生活感に影響を及ぼすことにもつながるのである。

エコツーリズムにおけるガイドンスは、人（ガイド） 人以外、の2つの手段に大きく分けられる。人によるガイドンスは、主に専門のガイドによって行われるガイドつきツアーや、ビジターセンター職員などによる自然の解説がある。人以外の場合は、施設内の展示物や野外の看板、印刷物、インターネットなどの電子メディアによるガイドンスが挙げられる。旅行者の体験をより豊かにするためには、ガイドつきツアーとともに、ビジターセンターなどの拠点施設における展示や他の様々な手段を効果的に組み合わせるとよい。

また、ガイドンスは、解説の内容と解説の手段によって構成される。



旅行者は足をとめ、とりつけられた解説版から、ガイドンスをうけることで意義やメッセージをうけとる。(スイスアレッツ地区)



ガイドによるガイドンスをうけることにより、見るだけでは知りえなかった自然の仕組みに驚く(長野県軽井沢)

4-1-2 地域の魅力の発見

～POINT～

ガイドンスの解説内容は、訪れた地域の自然や、生活様式、文化、産業、人などの地域の個性的な魅力である。

「地域の魅力」とは

ガイドンスの成功に重要な要素の一つである解説内容とは、訪れた地域の自然や、生活様式、文化、産業、人などにまつわることであり、これらは全て地域の個性的な魅力である。地域の個性的な魅力とは、原生的な自然の中での動植物の様子に限らず、毎日耕している田畑の景観、周囲の自然と生活の関わり、土地に伝わる生活の知恵など、様々な日々の営みまでもが魅力となりうる。地元住民にとっては当たり前のことが、外部の視点によって地域の魅力として観光資源となることはよくある。

従来の観光の対象となっていた雄大な景色や歴史的建造物に加え、ガイドンスの核となる地域の魅力には、次のようなものが考えられる。

- ・ 自然資源の科学的な視点からうまれる価値
- ・ 古くから育まれてきた文化的、歴史的な価値
- ・ 快適性ややすらぎを感じる空間的な価値



蔵からでてきた昔のひな段を飾る家をめぐることができる「ひなめぐり」の様子。旅行者が声をかければ家の中に入って見ることができ、主人から話を聞くことができる。(茨城県真壁町)

BOX4-1 地域の資源を探す:アイヌ語地名

地域によっては、エコツーリズムをやるうとしても、何も観光資源がない、と嘆いている人たちがいる。しかし、たとえば北海道では、先住民族であるアイヌ民族の残してくれた地名がいたるところにある。その地名を看板に併記して、その意味を正しく伝えるだけでもりっぱなエコツーリズムなのである。写真は旭川に最近できた、アイヌ語地名を平等に併記した看板だ。忠別川と漢字で書かれてはまったく意味がわからないが、アイヌ語を知れば、波のたつような急流であつたとか、サケがたくさんぼってくる川だったというかつての自然の姿がわかってくる。日の昇る方向から流れる川ということから、いまの旭川という地名がつけられたこともわかる。アイヌ語地名に限らず、その土地の古くからの地名や言い伝えを掘り起こすことはエコツーリズムの第一歩といえよう。もちろん先住民族の文化を尊重することはエコツーリズムの基本である。(小野有五)



~ POINT ~

魅力の発見には、文献調査や自らの研究による科学的な視点と、感覚的な視点が重要である。

魅力の整理

地域の魅力をエコツアーに作り上げる最初の段階は、地域の特徴となるような題材を発見し、そのおもしろさを評価することである。その方法には、文献調査や自らの研究による科学的な視点や、人間の感性などの感覚的な視点がある。

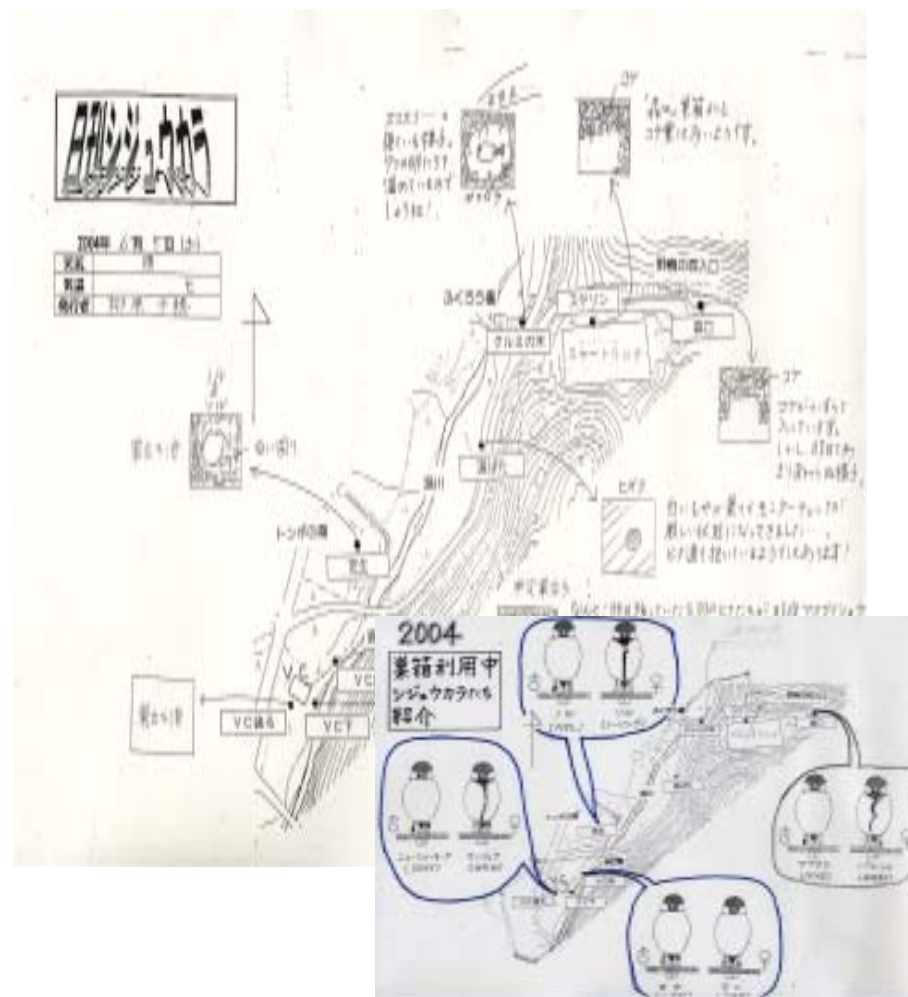
(1) 科学的な視点

文献調査

博物館や大学の研究論文など地域にストックされている文献をもとに、地域資源に関する知見を調べるなどして、魅力となる素材を整理・評価し、内容の正確さにつなげる。

自らの研究

動植物の生態などを自ら観察することで得たデータや、そこから新たに発見できたことを整理し、面白さをまとめる。



巣箱を利用しているシジュウカラたちに名前をつけ、日々活動を観察している。それらをまとめたシートがこの「日刊シジュウカラ」である。専門的な研究成果や深みのある情報には、難しさより、驚くことや、おもしろいことの方が多い。
(星野リゾート・ピッキオ)

(2) 感覚的な視点

自分の感性

自分が感じるきれいな景色や気持ちがいい場所、おもしろい自然現象や日々の営みなど、人に誇れる「これ」というもの、「自分のとっておき」を整理する。また、どんな点がすばらしいのか、どうしてすばらしいのかを自問自答し、書き記しておくといよい。

地元住民の感性

昔からその土地に暮らしているお年寄り、生業を営んでいる人たちに、自分が大切にしている場所や風景、現象などの話を聞く。

旅行者などの外部の感性

旅行者が立ち止まっている場所や、驚いている様子など、旅行者の行動を観察し、そこから、旅行者が感動した、おもしろかった、楽しかったと考えられることを整理する。

子供の感性

感受性の豊かな子供の視点に立って、資源をチェックすると、これまでは気づかなかった面白さにであうこともある。



地元に住む人にとっては見慣れた風景が観光客の目には新鮮に映ることは多い。最も美しく見える場所へ最適な時間に案内できるのは、地元に住むガイドだけである。(東京都小笠原村)

事例4-1 佐賀県鹿島市での「干潟体験」事業

佐賀県の鹿島市は有明海に面し、目の前には広大な干潟が広がっている。この干潟を埋め立てることなく、そのまま保全しながら地域の振興に役立てることはできないだろうか。そのような市民の思いで始まったのが、地域の漁民が伝統的に用いていたガタスキーを使って、干潟を楽しむ「ガタリンピック」であった。1枚の板のうえに乗って、そのままでは沈んでしまう干潟の上を自在に走り回るガタスキー。しかし、それだけでなく、干潟に生きるさまざまなカニやムツゴロウを見たり、泥だらけになって心地よい泥の感触を楽しむ「干潟体験」が、新しいエコツーリズムとして始められている。ここでは「道の駅」が拠点となり、地



元住民が設立した会社が、干潟体験を請け負っている。修学旅行生には人気が高く、去年は1年間で1万4,000人も参加者があった。ソーラーでわかしたシャワーを浴び、料理には、干潟でとれたムツゴロウや貝や魚だけを出しているのも、まさにエコツーリズムである。(小野有五)